

=====

THE VEDANTA KYOKAI

ヴェーダーンタ協会

日本ヴェーダーンタ協会の最新情報

2004年7・8月 第2巻 第7号

<http://www.vedanta.jp/multimedia/pdf/newsletter/index.html>

ニュースレターをご希望でない方はタイトルを停止と書いて返信ください。

=====

目次

- ・ かく語りき 聖人の言葉
- ・ 今月の予定
- ・ シュリ・サラダ・デヴィとスワミ・ヴィヴェーカーナンダの生誕祝賀会、
東京で開催
- ・ 今月の思想
- ・ 忘れられない物語
- ・ CD発売のお知らせ

.....

かく語りき 聖人の言葉

「このような無味乾燥な議論はおやめなさい。あれこれ理論ばかり並べて。理論をめぐらすことで神を悟ることができた人がいったいいるのですか。」

ホーリーマザー シュリ・サラダ・デヴィ

「神を解き明かそうとする試みはみな無駄である。おお、ナナクよ、彼の偉大さを認めるのだ。彼だけが彼自身を知っているのだ。」

グル・ナナク

.....

協会おこなった行事

生誕日：

スワミ・ラマクリシュナーナンダ 7月15日

協会での催し物：

逗子例会 7月18日(日)午前11時

御岳山リトリート(霊性修養会)

8月6日(金)~9日(月)

.....

シュリ・サラダ・デヴィとスワミ・ヴィヴェーカーナンダの生誕祝賀会、 東京で開催

日本ヴェーダータ協会が東京都豊島区・豊島公会堂で開催するスワミ・ヴィヴェーカーナンダ生誕祝賀会も今年で11回目を迎えました。毎年、来賓の皆様、協会のメンバーやご友人、ボランティアの方々が集い、会場は寛容の精神と普遍の英知に満ちあふれた真の聖地と姿を変え、世界が誇る、現代の最も偉大な預言者の生誕を公式に祝います。

毎年6月に行われるこの催しで、協会はスワミ・ヴィヴェーカーナンダの普遍のメッセージを日本の皆様に紹介しています。入場料は無料で、参加者に寄付のお願いもしていません。開催資金は主に、祝賀会用パンフレットの広告料や寄付等でまかなわれています。

信仰を実践する重要性の理解、靈性に満ちた生活の追及について説いた、スワミ・ヴィヴェーカーナンダの示唆に富む比類なき教えを、有識者から成るパネリストがさまざまな宗教観や見地から幅広く討議するシンポジウムが、プログラムの大きな呼び物となっています。今年はホーリーマザー、シュリ・サラダ・デヴィの生誕150周年に当たるため、祝賀委員会ではラーマクリシュナ・ミッションのホーリートリニティ（三位一体）の御一方であるホーリーマザー、シュリ・サラダ・デヴィをシンポジウムのテーマとすることにしました。

会場準備

祝賀会の開始は2時でしたが、ボランティアの方々が早くから集まって会場の準備に取り掛かりました。場内には生花が飾られ、大掛かりなAV機器の設置に続いて入念な配線チェック。ロビーには販売用の本、CD、カセットテープ、写真、線香などが並べられました。壇上には、パネリスト用席、演奏用の楽器、「生誕祝賀会」と記した横断幕、演壇などと共に、自信に満ち溢れたスワミ・ヴィヴェーカーナンダの立ち姿の等身大写真が真新しい額入りで設置されました。さらに今年は、協会の礼拝所などでよく目にする、白黒のコントラストが非常に美しい、居姿のシュリ・サラダ・デヴィのお写真が入った大きな額も飾られました。また、照明も念入りに調整され、壇上では舞台効果がありながら登壇者が不快に感じることがないように、観客席では視界を損ねない程度の暗さになるよう配慮がなされました。

ステージ下の控室では、讃歌を歌うグループが音合わせやリハーサルに余念がありません。控室の右手から続く通路には、ボランティア用のお昼(カレーとスープ)を準備する食事係の方々の、楽しそうなおしゃべりや笑い声が響いていました。2時きっかりに、スワミ・メダサーナンダと2人の信者がヴェーダの詩の詠唱を始め、会場は厳粛で荘厳な雰囲気になりました。続いてスワミにより、歓迎の挨拶、パネリストの方々の紹介、ホーリーマザーの簡単な紹介がなされました。そして、スピーカーの山田泰子氏と駐日インド大使マニラル・トリパティ閣下が、ホーリーマザーとスワミ・ヴィヴェーカーナンダのそれぞれの御足元に花束を捧げました。

大使、ヴィヴェーカーナンダを語る

続いて、マニラル・トリパティ大使がスワミ・ヴィヴェーカーナンダについてスピーチをされ、「すべての宗教は普遍であり、ひとつの大きな家族である全人類が人種の隔たりなく友情、理解、調和を育むべきだとする、スワミの考えや姿勢」について話されました。さらに大使は、ラビンドラナート・タゴールやジャワハール・ネール元インド首相など著名人の言葉を引用して、スワミとその遺産を褒め称えられました。

大使は、受容についてのスワミ・ヴィヴェーカーナンダ自身の言葉も挙げられました。「スワミ・ヴィヴェーカーナンダはあらゆる宗教の正当性を支持し、それぞれ独立して存在する権利があると信じていました。スワミは宗教の普遍性について次のように言っています。『私たちの合言葉は‘受容’であり‘排他’ではない。耐え、許すだけではなく受け入れるのだ。私は受容の正しさを信じる。私はあらゆる宗教を受け入れ、あらゆる信仰の形における神を崇敬する。過去、現在、そして来たるべき未来のすべての偉大なる預言者に敬意を表する。』」

「スワミ・ヴィヴェーカーナンダは、あらゆる宗派の優れた教えをまとめ、調和することに注意を向けるよう、常に努力していました。例えば、奉仕の重要性については、どの宗教でも教義や聖典の中で説いています。ヒンズー教聖典のある教えは、英語で次のように翻訳されています。『ブラーナ（ヒンズー教の聖典）やさまざまな聖典の中にある、"他人に善行をなせば徳となり、悪行をなせば罪となる"という賢人ヴィヤスの言葉は真実であると知れ。』これを、キリスト教の教えと比べてみましょう。『汝の同胞に仕えることは私に仕えることであると知れ。』また、イスラム教の格言にも同様の考えが見られます。『信仰を口にするだけでなく、同胞に善をなし仕えることが真の祈りである。』」

最後に大使はこう言われました。「皆さん、全人類が一つの家族であるという概念（Vsudhaiva Kutumbakum）はインドの素晴らしい思想であり、人類共通の遺産と言えるでしょう。全人類を一つの家族とする記述は数千年前の聖典の随所に見られます。幸運なことに、インドの地には極めて優れた男女が絶えず生まれ出で、全人類は兄弟であり一つであるという精神、全人類の友愛に加え家族愛の精神を途切れることなく伝えてきました。スワミ・ヴィヴェーカーナンダはまさにこの精神の体現者であり、最も強力な主張者なのです。」

ホーリーマザーのシンポジウム

大使はスピーチの最後に、協会の隔月刊行誌「不滅の言葉」ホーリーマザー記念献呈特別号および誘導瞑想の日本語CDを正式に公開しました（CDは口ビーの販売コーナーでも人気がありました。このニュースレター文末のお知らせをご覧ください）。続いて、スワミが英語と日本語とで短時間の誘導瞑想を行い、会場は安らぎに満ちた雰囲気となりました。そして、司会者の平野久仁子氏が、シンポジウムの進行役である東京外語大名誉教授奈良毅博士を紹介しました。奈良教授はシンポジウムでパネリストの通訳も務められました。シンポジウムのタイトルは「ホーリーマザー シュリ・サラダ・デヴィの生涯と教え」です。

パドヨ・ヨーガ・アシュラム代表の山田泰子氏が最初にスピーチされました。スピーチのタイトルは「ホーリーマザーと私」でご自身の経験に基づいたお話でした。山田氏はホーリーマザーの生誕地である「大変美しい」村・ジョイラームパーティーを訪問されたときのことや、幼いサラダの家族、しつけ、村での生活などに触れられました。また、日常生活でご自身が心がけていらっしゃる、ホーリーマザーの教えをいくつか挙げられました。「マザーは普遍の母の体現者であ

り、今なお生きた聖母として尊敬を集めています。」「マザーは、亡くなる5日前、ある信者にこう言いました。『なぜ悲しむのですか。あなたは、師ラマクリシュナを見たではありませんか。すべての人を自分の家族だと思のです。忘れないで、私はいつもあなたと共にいますよ。』」山田氏は最後にこう言われました。「私は、ホーリーマザーのお写真をじっと見つめていると、マザーが微笑んで『帰っていらっしやい』とおっしゃっているように見えるのです。そして、こうして皆様にお話している今この時も、私の心はジョイラームパーティーにあります。」

続いてお話されたのは、ラジオ・ジャパンのアナウンサー、ルマ・グプタ氏でした。グプタ氏は、シュリ・サラダ・デヴィの素晴らしさについて深く論じるには自分は力不足であり、代わりに普遍的母性に対して自分が感じたことを中心に話したいと言われました。グプタ氏はマザーの家族や家庭、シュリ・ラマクリシュナとの肉欲とは無縁の結婚などについて触れられました。そして、ホーリーマザーの分け隔てのない慈悲の心、無条件の愛、人種や人の性質に関係なく誰にでも喜んで教えを授ける気性などを挙げられました。また、マザーが師ラマクリシュナに夕食を運ぶ役目を人に譲ったため師にとがめられた話を披露してくださいました。師から二度と人にやらせないと約束してくれと言われたときにマザーはこう言われたそうです。「そんな約束はできません。あなたは私だけの師なのではなく皆の師なのですから。」

最後にスピーチされた清泉女子大学教授・松井ケティ氏はまた違う観点からお話されました。氏は、マザーが、UNESCOが推進する自由世界の「平和の文化」における理想の女性像にまさに当てはまり、この女性像を身をもって実践された最初の方だと分析されました。現代女性に課せられたさまざまな社会的役割を考えると、マザーは最高の主婦であり、かつ働く女性であると言われました。妻として夫に仕え食事を用意し、夫の弟子を自分の弟子として手厚く世話し、誰にでも無条件の愛を注ぎました。働く女性として夫の遺志を継ぎ、義務としてではなく愛と喜びに満ちて使命を果たしました。「ホーリーマザーは地球市民の先駆けでした。カーストや宗教、国籍に関係なく、生きとし生けるものすべてに愛を注ぎました。人間が作り出したあらゆる壁をものともみませんでした。自分を愛し、何の見返りも期待することなく人を愛しなさい このメッセージこそ、自分の属する組織（家族、社会、民族、国家等）への帰属意識を超え地球市民としての理想を体現する、マザーの教えなのです。」

結び

奈良教授は結びの言葉として、パネリストの三人三様のお話について英語と日本語で感想を述べられました。続いて祝賀委員会書記のA・P・S・マニ氏が感謝の辞として参加者の方々にお礼を言いました。

そして、日本人とインド人のグループがそれぞれ讃歌を披露しました。はじめは日本人グループ。女性信者6人と、日本語讃歌の作詞・作曲・編曲を手がけた泉田香穂里（シャンティ）さんが美しい浴衣を着て歌いました。次のインド人グループも総勢7人で、歌に合わせてサムドラ・グプタ氏がキーボードを、ヒサモトマサノリ氏がタブラを演奏されました。女性は皆見事なサリーを着ていました。

讃歌に続いて茶菓が振舞われ、最後に「聖母シュリ・サラダ・デヴィ」というタイトルのスライドが上映されました。スライドの解説は奈良教授が日本語で行いました。そして、今年のパネルディスカッションが無事終了し、5時過ぎに祝賀会は幕を閉じました。

しかし祝賀会はこれで終わったわけではありません。最後の大事な、跡片付けが残っています。配線はすべて外され、販売用の書籍等も梱包されました。会場を飾った生花は来場者が自由に持ち帰れるようにしました。最後まで残っていた二十人ほどのボランティアはスワミ・メダサーナンダと共に、池袋駅の反対側にある店で楽しく夕食を取りました。この食事はフィリピンからいらしていた方のもてなしでした。皆、祝賀会が成功し有意義な一日を過ごせたことを喜び、互いの労をねぎらいました。

.....

今月の思想

人間は己の弱さを知らぬことを責められるが、己の強さを知っているものもほとんどいない。

土地と同様に人間には、所有者の気付かぬ金脈が時折隠れている。
ジョナサン・スウィフト

.....

忘れられない物語

合気道の精神

けだるい春の午後、電車が東京の郊外をガタガタ音を立てて走っていた。我々の乗った車両は比較的空いていて、子供づれの主婦が二、三人と、買い物に行くお年寄りたちだけであった。私はくすんだ色の家や埃っぽい生け垣をボーっと眺めていた。

ある駅でドアが開いた時、午後の静けさは突然破られた。乱暴に怒鳴り散らし訳の分からない悪態をつきながら、一人の男が我々の車両に乗り込んできたのだ。作業服を着たその男は体が大きく、酔っていて汚かった。叫びながら、赤ん坊を抱いていた女性を殴った。女性はお年寄り夫婦の膝の上に倒れた。赤ん坊が無傷であったのは奇跡であった。老夫婦は恐怖のあまり飛び上がり、車両の一方の端に逃げ去った。男は逃げていく老婦人の背中を蹴ろうとしたが、婦人のほうが一足先に安全な所に逃げたため失敗した。この酔っ払った男はそのことにひどく腹を立て、車両の中央にある鉄柱を捻じ曲げようとした。男の手は切れ、血が出ているのが見えた。恐怖に凍りついたままの乗客を乗せて電車は走り続けた。私は立ち上がった。

二十年ほど前の当時、私は若くて体格もよかった。過去三年間、ほぼ毎日みっちり八時間を合気道の稽古に費やしていた。投げ技とつかみ技を得意とし、自分は強いと思っていた。問題は我が技を実践で試したことがないことだった。合気道の生徒は戦うことは許されていなかったのだ。私の師は何度となくこう言っていた。「合気道とは調和の道である。戦う気持ちは持っている、宇宙とのつながりが壊されてしまう。我々はどうかしたら対立を解消できるかを学ぶべきであって、対立を引き起こす方法を学ぶわけではないのだ。」

私は師の言葉を守り、それに従おうと努力していた。時には駅の周辺をうろついているチンピラを避けるべく、道の反対側に移ったりもした。私は自分の忍耐

強さを自慢に思った。強いだけでなく人より優れた人間だと思っていた。だが、心の中では絶対的な道理にかなった機会を求めていたのだ。悪者を打ちのめして罪のない人たちを救う機会を。

今がまさしくその時だ。チャンスが来たぞと思った。人が危険にされされている。もし私がすぐに何かしなければ、おそらくこの人たちは怪我をする。

私が立ち上がったのを見て、この酔っ払いは憤怒のはけ口を得たと思い、吠え立てた。「おい、外人。日本の礼儀を教えてやるぜ。」

私は頭上の吊り革を軽く握ると、嫌悪と拒絶の混じった一瞥をくれてやった。私の狙いはこの馬鹿者を脇へ連れて行くことにあったが、そのためには男の方が先に動き出さなければならなかった。私は男を激怒させるべく、口をすぼめて横柄なキスを投げかけた。

「よし、思い知らせてやる。」男は叫び、いきり立って私の方に突進しようとした。

男が動き出そうとしたその瞬間、誰かが「やあ！」と叫んだ。それは耳をつんざくような叫びだったが、妙に陽気で快活な調子を帯びていた。まるで友人と何かを一生懸命探していて、友人が急にそれを見つけたときに発する叫びのようだった。「やあ！」

私は左を見、男は右を向いた。我々の目に入ったのは、小柄な老人であった。七十代と思われるこの小柄な老紳士は、きちんと着物を着ていた。私にはまったく注意を払わず、作業服の男をうれしそうに見つめた。それはまるでとても重要な楽しい秘密を分かち合いたいかのようであった。

「こっちへ来んか。」老人はくだけた土地訛りで言い、酔っ払いに手招きした。

「こっちへ来てわしと話そうや。」軽く手を振った。

大男は糸が付いているかのように老人の方に引き寄せられていったが、老紳士の前に来ると仁王立ちのまま喧嘩腰に吠え立てた。列車のきしむ音にさえその怒声は遮られなかった。「畜生！一体何でてめえなんかと話をしなきゃならねえんだ。」酔っ払いはもう私に背を向けていた。もし男のひじがほんの一ミリでも動いていたら、私は男を殴り倒していただろう。

老人は相変わらず男を笑顔で見つめ、興味深げに「何を飲んでたんだい。」と聞いた。「酒だよ。」男は怒鳴り返した。「てめえには関係ねえだろ。」つばが老人にかかった。

老人は言った。「おや、それはいいことだ。実に素晴らしいね。わしも酒が好きなんじゃよ。毎晩、女房とわしは、女房は七十六だがね、徳利を一本温めて庭へ持って行くんじゃ。古い木の椅子に腰掛けてねえ。日が落ちていくのを見たり、庭の柿木の成長ぶりを見たりするんじゃ。わしのひいじいさんが植えた木でなあ。去年の冬、寒波にやられたんで心配しておったがのう。土地が痩せているのに、わしらが期待しておった以上によくもってくれていての。酒を飲んでこれを眺めるのは本当に楽しいもんじゃ。わしらは庭に出て夜を過ごすんじゃ。楽しいぞ。雨が降ってもな。」老紳士は目を輝かせて作業服の男を見上げた。

男は、老人の話に聞き入るうちに表情が和らぎ、握り締めていたこぶしも徐々にほだかれていった。男は言った。「そうだな。俺も柿が好きだ。」男の声は次第に小さくなっていった。「そうじゃろう。あんたにもいい女房がいるんだろうねえ。」

「いや。」男は答えた。「かかあは死んじまった。」電車のゆっくりとした揺れに合わせるように、男はすすり泣きを始めた。「俺にはかかあもいねえ。家もねえ。仕事もねえんだ。自分が情けねえよ。」涙が男の頬をぬらし、絶望のむせび泣きに男の体が小刻みに震えた。次は私の番だった。人生の表層しか知らぬ若

者として、「民主主義のためにこの世界を守るのだ」という思い上がった正義感でそこに立っていた私は、突然、自分がその男より汚れた存在だという思いにおそわれた。

その時、電車は私が降りる駅に着き、ドアが開いた。老人が男に慰めの言葉を投げかけているのが聞こえてきた。「それはさぞつらかったじゃろうねえ。ここに座って、もっと話を聞かせてくれないかい。」

最後にもう一度振り返って見ると、作業服の男は座席に寝そべり、老人の膝の上に頭を乗せていた。老人は汚れてもつれたその髪をそっと優しくなでていた。

電車がホームを離れ、私はベンチに腰を下ろした。私が腕ずくでやろうとしたことが、優しい言葉によって成し遂げられたのだ。まさしく合気道が実戦で試されるのを見たのだ。その本質は愛であった。自分が全く違った心根を持って合気道に取り組みねばならないことに気付いた。私に対立の解決法を話せるようになるには、長い年月がかかるのだろう。

(テリー・ドブソン『Soul Food, Stories to Nourish the Spirit and the Heart』より)

.....

CD 発売のお知らせ

『DHYANAM (ディヤーナム)』 スワミ・メダサーナンダによる誘導瞑想 (日本語)

内容：

- ・ はじまりの音楽
(Opening Music)
- ・ 礼拝のマントラ
(Pranam Mantras)
- ・ 坐法、その他の準備
(Sitting and other Preparations)
- ・ バクティ・ヨーガによる誘導瞑想
(Guided Meditation According to Bhakti Yoga)
- ・ ギャーナ・ヨーガによる誘導瞑想
(Guided Meditation According to Jnana Yoga)

讃歌： サムドラ・ダッタ・グプタ

シタール： ドクター・チャンドラカント・サルデーシュムク
Dr. Chandrakant Sardeshmukh

タブラ： 井上憲司

シンセサイザー： 泉田香穂里

ご注文はこちらまで <http://www.vedanta.jp>

=====

発行：日本ヴェーダーンタ協会

249-0001 神奈川県逗子市久木 4-18-1

Tel: 046-873-0428

Fax : 046-873-0592

Website: <http://www.vedanta.jp>

Email: info@vedanta.jp

[KENB014J]

=====